

芸術・文化賞 プラープダー・ユン

(タイノ作家、映画作家、アーティスト)

【贈賞理由】

プラープダー・ユン氏は、タイを代表する作家の一人である。氏は1998年以降、精力的に小説を発表し続けているほか、評論家、脚本家、エッセイスト、翻訳家、グラフィックデザイナー、イラストレーター、写真家、ミュージシャンとしても活躍するマルチクリエイターであり、日本文化に造詣が深いタイ知識人でもある。

プラープダー氏は1973年にバンコクに生まれた。父は英字新聞社のオーナー、母は女性誌の編集長であった。中学を卒業後に渡米、ニューヨークのクーパー・ユニオン大学で芸術の学士号を修得し、兵役に就くため1998年にタイに帰国した。氏はその後、新聞や雑誌コラム、短編の執筆などを経て、大都会に蠢く風変わりな群像を描いた初の短編集『直角の都市』（2000年）を刊行した。同時に発売された短編集『可能性』（2000年）が、新奇な文体と表現技法、社会から孤立した都会人を描いた内容、実験的な装丁などで世間の注目を浴び、2002年の東南アジア文学賞を受賞した。当時のタイは経済発展に伴って都市中産階級が伸張し、映画、芸術、食文化等の分野で海外に「タイのアイデンティティ」を盛んに喧伝した時代であり、著名人を両親に持つセレブリティと、米国帰りの都会センス溢れるクリエイターであった氏を新世代の旗手であると見なす「プラープダー現象」とも呼べるブームが起きた。その後の氏は、多くの小説、エッセイ、外国文学翻訳を発表し、良質の作品を持続的に生み出せる本格作家であることを証明した。氏が脚本を担当し、日本の俳優が主演した『地球で最後のふたり』（2003年）など2本の映画は、日本を含む各国の国際映画祭で上映され注目を集めた。

都会派作家としてのプラープダー氏の思想的遍歴は、『新しい目の旅立ち』（2015年）で一つの到達点に至った。この作品は、氏が日本財団の助成金を得て訪れた、「黒魔術の島」と呼ばれる、地元の祈祷師や元教師の日本人が暮らすフィリピンのシキホール島での人間・自然観察と内観によって獲得した世界認識、オランダの哲学者スピノザの思想との対話、米国のナチュラリストであるソローが実践した森の生活への考察によって構成され、哲学的思索と文芸的技法の融合から、現代の都市人としてのアイデンティティを興味深く描き出した。

プラープダー氏は、日本の雑誌『EYESCREAM』に2004年から3年間寄稿したエッセイで等身大の日本人、日本文化を紹介し、思い込みや誤解があったタイの日本観に新たな視座を与えた。「日本は私の恋人である」と公言する氏の日本滞在は多数回に及び、大学の夏期講習で禅思想や『方丈記』など古典文学を学んだり、茶道に親しんだりしている。氏は、出版社と書店を経営したり、アジア太平洋出版者協会会長やタイ出版社・書籍販売業者協会副会長を務めたこともある。

プラープダー氏はアジア作家の中では邦訳数が多い作家の一人である。英、仏、伊、中国語訳もあり、氏に対する世界の関心は高い。氏の創作活動は、タイ文学・思想の発展に寄与するだけでなく、日本理解の更新にも貢献している。人類が人間と自然の調和を図る持続可能な生存様式を模索する中、アジアの一作家として今後の人類のあり方への哲学的考察を深めるプラープダー・ユン氏の功績はまさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。